

平成 26 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2014年4月～2015年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満たないもの、報告書が2年連続して未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧告させていただくことがありますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 小浜市立内外海小学校

種別  保育園・幼稚園  小学校  小中一貫教育  
 中学校  高等学校  中高一貫教育  
 教員養成  技術/職業教育  
 特別支援学校  その他 ( )

住所 〒917-0106  
福井県小浜市阿納尻45-9

E-mail : uchitomi@edu.city.obama.fukui.jp

Website : \_\_\_\_\_

児童生徒数：男子 37 名 女子 42 名 合計 79 名  
 児童・生徒の年齢 6 歳～ 12 歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ( )

## 4. 活動内容

### (1) 1年間の主な活動内容

#### 〔目的〕

地域の人々との交流や体験活動を通して、ふるさと内外海の自然とその恵みについて理解を深め、未来まで大切に守っていくことについて考え行動しようとする態度を養う。

#### <6年生の学習活動>

##### (1) 食の世界遺産「鯖のなれずし」作り 5月～11月

○「鯖のなれずし」作り体験を通して、伝統の食文化を守り伝え、地域の活性化に貢献する人々に生き方を学ぶ。



田鳥区の森下さんによる、「鯖のなれずし」作りの体験活動を行った。「鯖のなれずし」は5月～6月にまず「鯖のへしこ」（ぬか漬け）にする作業を行い、一夏樽に寝かせ11月になると塩とぬかを落とし糍を腹に詰めてもう一度樽につける。内外海地区の伝統食文化であり、どの集落においてもそれぞれの家の味のなれ鯖をつけてきたが、高齢化が進み、今では家庭ではあまり作られなくなってしまった。この内外海地区の伝統食文化を守り、伝えようと、熱い思いをもって活動されて

いる森下さんに指導を受け、6年生は全員が鯖をさばき、なれずし作りに取り組んだ。地域の文化の継承、地域の産業の活性化、ふるさと興しに尽力されている森下さんのお話により、児童は、ふるさと内外海の誇りを学び、守り受け継いでいこうとする意識を新たに持った。

##### (2) 「鯖街道」を京まで

○ 「内外海の鯖巾着船団の歴史(海道)を学ぶ」11/23



田鳥区の熊谷さんによる出前講座。熊谷さんは今年で85歳になる。内外海地区では船団を組み、巻き網漁で鯖漁を盛んに行ってきた歴史がある。その巻き網漁は「鯖の巾着網」と呼ばれ、5、6隻の船団を組み、遠くは能登半島沖、隠岐の島、境港のあたりまで繰り出していたということだ。日本海から内外海半島は言うまでもなく、丹後半島、鳥取の大山を、能登半島を眺望するという、ダイナミックな体験談に児童は聞き入っていた。

かつての船団が豊かな海の恵みを内外海地区にもたらしていた事実も当時の新聞記事（昭和40年代半ば）から発見。活気にわく小浜港の様子が記事になっている。鯖街道は内外海から始まっていたことを新たに知り、鯖街道の学習をスタートさせた。

○ 「鯖街道」の終点「京都出町柵形商店街」でふるさとの誇りをPR 12/11



内外海から始まった鯖街道は、熊川宿を通り、京都出町柵形商店街まで続く。児童は校外学習で、内外海の誇る食文化「鯖のなれずし」を持って鯖街道をたどり、京都出町柵形商店街で「内外海の鯖のなれずし」をPRした。道ゆく買い物客に声をかけ、なれずしの試食をしていただくとともに、伝統の食文化についてのプレゼンも行った。

## ○豊かな海を未来にまで「海と山は友達～植樹プロジェクト」協力PR 12/11

内外海の豊かで美しい海を守るために「海と山は友だちプロジェクト」を3年前から行い、学校の裏山に植樹を行っているが、京都の栴形商店街では、そのPRも行い、植樹のための協力金を募った。植樹活動の事後報告を商店街で行ってきたことも、信頼を得ることにつながっている。

### (3) 学校の裏山「志の道」に植樹、看板の設置 3/18

(6年生保護者 福井県嶺南振興局林業水産部 地元漁師 老人クラブ連合会)

6年生が卒業記念にナラ・ブナなどの広葉樹を学校の裏山「志の道」(2012年 老人クラブが開拓)に植樹する。これは6年生の保護者がどんぐりを植えて苗木に成長させたものである。内外海の海を守り豊かにしていく「海と山は友だちプロジェクト」の一環として、県の林業水産部からシカ対策のネットの提供、植樹する場所、方法等についての助言や指導を受けながら実施した。

### (4) 「地域の防災を考える」(内外海公民館、自主防災立ち上げ準備委員会) 2/6

内外海公民館で防災講座を実施した。自主防災立ち上げ準備委員会の委員長に出前講座をしていただき、地域の被災の歴史や地域の特性、現在の防災体制について学んだ。実際に大きな被害があった災害時の写真をもとに、被害の大きさや影響等に考えを巡らせることができ、いざというときに備えることの大切さや家族や地域で避難先や避難経路を話し合っておくことの重要性を実感することができた。

5年生の時には、家の祖父母を招き、内外海地区の災害の歴史についてグループ別話を聞いた経験があった。同じ災害でも、繰り返し様々な立場の人から様々な視点で話を学ぶことでイメージ豊かに思い描くことができた。

また、校外学習では神戸の「人と未来防災センター」を見学。そこでの学習ともリンクさせ、防災学習を深めることができた。地域に帰ったとき、家庭に帰ったとき、実際に家族と話し合いをするなど行動に移している児童が多く有意義な学習ができた。

地域からは、児童が防災について学習したことで、地域や家庭で話題にし、地域のお年寄りや保護者の意識を改革し、ひいては地区全体の防災意識を高めることができるのではないかと期待されている。今後、地域の子ども会と連携し、子ども会担当者や保護者、教師と一緒に地域を探検し防災マップを作るなどの取り組みにも発展させていきたい。

#### <5年生の学習活動>

#### 「海と山は友達プロジェクト」 海の環境を調べよう

##### ～若狭の「水」を見つめる 里山・里海のつながり～

5年生は、海の環境の現状を調べる活動を年間通して行ってきた。様々な立場で活動を行っている方に出前講座をしていただいた。宇久定置網の漁師による「温暖化による若狭湾の環境と魚の変化」県立大学院生による、「海環境に対する微細藻類の役割」若狭高校生による「海底湧水とアマモ」アマモの定植の活動をしているNPOアマモサポーターズと協働した浜のゴミ調査、アマモ栽培体験など。活動の幅を広げるフットワーク、ネットワークを広げ、子どもたちは海の環境の現状への理解を深めることができた。海の「水」に着目しながら山、森林に目を向ける学習活動に発展させていく。

### (1) 出張キャンパス「海環境に対する藻類の役割」(福井県立大学院生) 7/3



現代社会の暮らしが海の中の微細藻を増やし、海環境を変えてしまったという話から、微細藻の動画を見せてもらい海水のにごりを起こしているものがどんなものかを確認した。また、藻類の保水力を活用して、えりも町の草原づくり、クロ松の森林を再生させた事実や、身の回りの様々なものに活用されている例を学習した。藻類は地球規模で発生している問題の解決に



も役立つ頼もしいものであり、可能性に期待できるものであると理解することができた。

## (2) 出前講座「温暖化による若狭湾の環境と魚の変化」

((有) 宇久定置網 浦谷俊晴さん) 11/21

定置網漁体験でお世話になった漁師 浦谷さんにお話を聞いた。昭和 30 年代には、宇久の海にも鯖が「湧くほど」いたという。小魚も豊富にいてブリも見られたそうだ。高度経済成長とともに、海水が生活排水などで汚染され、海草が育たなくなり魚が卵を産みつける場所がなくこと、地球温暖化のため、海水の温度が高くなり、昔は九州地方で多くとれたサワラが福井県沖でとれるようになってきていることなど、漁師の眼から昔の海と今の海の変化を話していただいた。エチゼンクラゲの大量発生の原因や定置網への被害など、現実に行っていることを通して海の変化を知ることができた。

内外海の海を守るためには「山に広葉樹を植えること」と浦谷さん。「海と山は友だちプロジェクト」は今年で3年目になるが、この取り組みにつながる講義内容であった。



## (3) 出前講座「海の環境 海底湧水とアマモ」

(県立若狭高等学校海洋科学科の2年生) 12/2



山に降った雨水が地下水となり海の底からわき出してくる海底湧水が、とても少なくなっているという。海底湧水が減ると、海水の循環が悪くなり、海底に泥や汚れがたまってしまふ。また、海水の温度も上昇する。その結果、魚にとって重要なアマモ場が減ってしまった。魚はアマモに卵を産み付けたり、隠れて身を守ったりする重要な場所である。アマモ場が減ると、魚も減ってしまう。現在、アマモ場を増やすためにどんな取り組みがなされているかを知り、

努力している人々から学ぶことにした。そして、児童自身もアマモ場を増やし、豊かな内外海の海を守る行動を起こす取り組みを計画した。

## (4) 出前講座「海の環境 アマモ場を育てる」

(NPO 法人「アマモサポーターズ 海のゆりかごを育む会」) 12/9 3/5



アマモは海草であるが藻類ではない。藻類は岩場に生えるがアマモは砂地や土に根をはる。そのアマモ場が海底にたまったヘドロのために根をはることができない。そのため、アマモ場が縮小している現実がある。

甲ヶ崎と仏谷の漁師はカキの養殖を行っているが、4、5年前からカキがとれなくなったり病気になったりしている。そこで、地元漁師たちはアマモ場を広げる定植活動に取り組み始めた。植えたことがアマモ場の拡大につながるかどうかは未知ではあるが、アマモの定植活動を通して海環境の改善への意識を高めることも大きな目的である。児童は実際にアマモキットを使い、教室で苗を育てて今後海に定植する計画である。

## 「海のゴミ調査」 12/9



内外海の浜にはどんなゴミが流れ着いているのか、どこからやってきたものなのかを浜のゴミ拾いをして調べてみた。そして、そこからわかる問題点や解決策を考えた。発生源を絶つこと、回収すること等考えられるが、だれがどのようにするか、費用はどうするのか等、クリアしなければならない課題はまだまだありそうだったゴミには、外国からの漂流物のほか、不法投棄や地元の花火大会のちりなどもあった。地元民の出して

いるゴミも含まれている様子に、どうかしなければという児童の意識は高まった。児童は、内外海の家環境を守るために「自分たちにもできることはどんなことかを考えて、ゴミのポイ捨てを防止、ゴミの持ち帰りを促すための観光客に訴える看板の設置や甲ヶ崎の浜の定期的なゴミ拾いに取り組むことを決めて実施している。

## (5) 現地調査「水源林 下根来の森林を探る」

(小浜市農林水産課 猟友会 環境アセスメント) 12/8

昨年度は中名田の山と内外海の山とを見比べて、その荒れ方に注目した。今年度は北川の水源となる下根来の山林を観察し、獣により下草がなくなり、木々が倒れたままに放置されている山の様子、土石流をふせぐための「せき」に流木や石がたまっている上流の様子を観察して、水害や土石流などの災害に対する意識も高めることができた。森林は「緑のダム」と呼ばれ、豊かに水をたくわえ、



水流を調節し、下流域の村々に大雨のときにも被害が及ばないようにする大切なものであるが、今獣害とともに、山の手入れが行き届かず、水源林が荒れてきていることを眼前に見ることができた。内外海地区から遠く離れた遠敷地区のことではあるが、水は地下水脈でつながり、小浜湾へと注がれている。豊かな森があれば、海に注ぐ水も豊かで美しい。豊かで美しい水が注ぐ海、あるいは海底から豊かな水

がわき上がる海であれば小浜の海は豊かなまま守られる。水を介した山と海のつながりを見ることができた学習であった。

## <校内研修> 出前講座「若狭の里山、川、海つながり」

(福井県立大学海洋生物資源臨海研究センター 富永修 教授) 2/9



森林が国土の3分の2を占める森林大国である日本。その森林が荒廃しているのが現状である。海環境にとっての森林の果たす役割をいくつか紹介されたが、地下水の水質浄化、栄養塩の調節作用など海の健全性を保つが、他にも、川への落下昆虫が生物のえさとなることや、木陰が水温の上昇を抑え水温調節をしていることから海の生物の生命を守る働きをしていることがわかった。

講座の後半では、小浜の地下水脈にふれ、小浜の地下水マップ作りなど「小浜海のまちづくり協議会」が「水をみんなで知ろう」と取り組み始めていることや、海と陸の接しているところ生物が季節によってどのように変化していくかを調べると生物の多様性に触れられるという話は具体的で身近に感じられた。内外海地区甲ヶ崎や堅海の浜でもイサザやアサリなど海環境の調査に活用できる素材はいくらでもある。今後の学習の展開に期待

がふくらんだ。

以上の活動は、地域の人々を中心に、行政、研究者などの人々とのつながりを広げながら展開してきた。人とのネットワークを大切にしながら学習を進める中で、生き方も学ぶことができた。ふるさと内外海を誇りに思う気持ちを高めるとともに、地域の自然（海、山 とそれをつなぐ水）について理解を深め、未来まで大切に残していく具体的な行動を考えることができた。今後はさらに、地域に生きる一員として行動する力をつけるとともに、地域の人々にも実践の輪を広げていけるように発進力を高めていきたい。

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（ \_\_\_\_\_ )